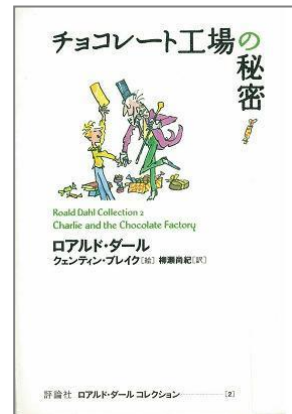


本のぽけっと

5・6年生のころに一度は出会ってほしい
図書館おすすめの本を集めました。



中央図書館
平田図書室
自動車図書館
行徳図書館
信篤図書館
南行徳図書館
市川駅南口図書館

だれも知らない小さな国 コロボックル物語 1

佐藤さとる／作 村上勉／絵 講談社

913
サ

小学3年生のころ、ぼくは町はずれの峠山の近くで、だれも知らない小山を見つけた。そこは美しいずみがわき小川が流れる所で、自分だけの秘密の遊び場になった。

ある日、ぼくは、小川を流れていく赤いくつに小指くらいの小さな人が二、三人乗って、かわいい手をふっているのを見た。夢中でくつに飛びついたけれど、つかんだくつの中は空っぽで、その後彼らに出会えないまま、ぼくは引越して小山を離れていった。

そして何年かがたち、再び小山を訪れるようになったある晩、小さな人たちがぼくの前に姿を現したのだ。

ふたりのロッテ

エーリヒ・ケストナー／作 池田香代子／訳

943
ケ

ヴァルター・トリアー／さし絵 岩波書店 (岩波少年文庫)

夏休みを過ごす子どもの家に出会ったロッテとルイーゼは、髪型以外はそのくくり。自分たちがふたごの姉妹で、両親の離婚によってはなればなれになっていたと知った二人は、ある計画を立てる。ロッテは巻き毛のおてんばルイーゼに、ルイーゼはおさげのきまじめなロッテになりすまし、入れかわって、写真でしか見たことのない親の待つ家へと帰るのだ。見た目は同じでも、性格も得意なことちがう。彼女たちの冒険はうまくいくのだろうか。



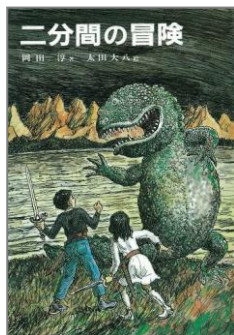
二時間の冒険

ぼうけん

岡田 淳 / 著 太田 大八 / 絵 偕成社

悟は二時間でもどる約束でとげぬきを保健室に返しに行く途中、黒ネコの“ダレカ”に話しかけられ、不思議な世界に送りこまれた。ここで「いちばんたしかなもの」に姿を変えた“ダレカ”を見つけ、「つかまえた」と叫ばない限り元の時間、場所には帰れないという。しかたなくその世界に足を進めてみたが、そこは子どもだけで暮らし、やがて皆が竜のいけにえになる、とんでもない所だった。

913
オ



チョコレート工場の秘密

ひみつ

933
ダ



ロアルド・ダール / 著 柳瀬尚紀 / 訳
クエンティン・ブレイク / 絵 評論社
(ロアルド・ダールコレクション 2)

チャーリーの町のチョコレート工場は世界中で有名だが、門には錠がかり秘密のベールに包まれていた。ある時、社長のワンカ氏は、黄金切符を手に入れた5人の子どもを工場に招待すると発表した。板チョコにかくされた5枚の切符を求めて、みんなはチョコを買い占めようと大騒ぎ。そして最後の1枚を当てたのは、なんと毎日の食べるものにもこまるような、貧しいチャーリーだった。

ピンクの砂糖キャンディーの船が熱々に溶けたチョコレートの川に行く。そこで働いているのは、たくさんのウンパッパ・ルンパッパ人。世にも奇妙な工場見学ツアーが始まった。

★続編に『ガラスの大エレベーター』があります。

くまのパディントン

マイケル・ボンド / 作 松岡享子 / 訳
ペギー・フォートナム / 画 福音館書店

933
ホ

ブラウン夫妻がパディントン駅で出会ったのは、帽子をかぶりスーツケースに座ったクマでした。遠くペルーからやってきて、ロンドンには行くあてがないというそのクマに、ブラウンさんたちは駅と同じ名前をつけ、一緒にくらすことにしました。パディントンは、菓子パンを食べればクリームとジャムだらけになり、お風呂に入ればおぼれてしまいます。地下鉄の駅では迷子になったあげく、エスカレーターを止めてしまう大騒ぎを起こしました。いつもハラハラさせられますが、それでもブラウンさん一家は、うちの中にクマがいるっていいものだ、と思っています。

★パディントンのお話にはシリーズがあります。

大きな森の小さな家 インガルス一家の物語 1

ローラ・インガルス・ワイルダー / 作 恩地三保子 / 訳
ガス・ウィリアムズ / 画 福音館書店

933
ワ

北アメリカの「大きな森」の小さな丸太の家で、5歳の女の子ローラが、家族とくらしていました。ここでは森で狩りをし、畑を耕し、何でも自分たちの手で作ります。育てたブタをハムやソーセージにする日は父さんも母さんも大いそがし。でも、ローラと姉のメアリイにとってはとても楽しみな日です。ブタの膀胱はふくらまして風船にして遊べます。石炭の上でしっぽをあぶるのはわくわくするし、こんがり焼けたしっぽのおいしいことといったら。

きびしい大自然の中でも生き生きと豊かに過ごす、家族の1年の物語です。

